よしつねせんぼんざくら

義経千本桜

〔解　説〕

竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作。延享四年（一七四七）大坂竹本座初演。全五段の時代物。この作品は「仮名手本忠臣蔵」「菅原伝授手習鑑」と共に浄瑠璃の三大傑作とされています。義経伝説の堀川夜討ち、大物浦、吉野落ちの三事件を骨子とし、そこに壇ノ浦での平家滅亡に際して死んだとされた知盛（とももり）、維盛（これもり）、教経（のりつね）が、実は生きていて源氏に復讐しようとする筋がからませてあります。

〔ここまでのあらすじ〕

義経は平家追討の功により、後白河法皇から初音の鼓を賜りますが、実はこれには頼朝追討の院宣（いんぜん）が託されていました。頼朝は義経に使者を遣わし、知盛・維盛・教経の首が偽首であったこと、初音の鼓のことを詰問します。義経は申し開きをし、平家の出である義経の妻卿の君は自ら命を断って和睦をはかりますが、追っ手に押し寄せた土佐坊を弁慶が切ったことにより全ては水の泡となります。

義経はあとを慕ってきた愛妾静御前（しずかごぜん）を家臣佐藤忠信に託して、都を落ちていきます。静御前は、吉野に義経がいると聞いて、忠信と共に吉野への旅に出ます。

（一般社団法人　義太夫協会発行）

道行初音旅

恋と忠義はいづれが重い、かけて思いははかりなや。

忠と信の武士に、君が情けと預けられ、静かに忍ぶ都をば、後に見捨てゝ旅立ちて、作らぬ形も義経の、御行末は難波津の、浪にゆられて漂ひて。今は吉野と人伝の、噂を道のしほりにて、大和路さして慕ひ行く。

谷の鶯な、初音の鼓〳〵。調べあやなす音につれて、連れてまねくさ。

遅ればせなる忠信が旅姿、背に風呂敷を、確と背たら負ふて、野道畦道ゆらり、ゆらり、軽いとりなりいそ〳〵と。

「目立たぬ様に道隔て、女中の足と侮つて、さぞお待ち兼ね、こゝ幸ひの人目なし」

と、姓名添へて給はりし、御着長を取り出だし、君と敬ひ奉る。

静は鼓を御顔と、よそへて上に沖の石、

「人こそ知らね西国へ、御下向の御海上、波風荒く御船を、住吉浦に吹き上げられ、それより、吉野にまします由、やがてぞ参り候はん」

と、互ひに形見を取り納め。

〽雁と燕はどちらが可愛ひ、やゝを育つる燕が可愛ひ、花を見拾つる雁金ならば、文の便もまたの縁、エヽさふぢやいな〳〵。諷ふ声々面白や。

「げにこの鎧を給はりしも、兄継信が忠勤なり」

誠にそれよ来し方の、思いぞ出づる壇の浦の、海に

兵船平家の赤旗、陸に白旗、源氏の強者。『あら物々しや』と夕日影に長刀を引きそばめ、『何某は平家の侍、悪七兵衛景清』と、名乗り掛け〳〵、薙ぎ立て〳〵薙ぎ立つれば、花に嵐の散々ぱつと、この葉武者、『言ひ甲斐なしとや方々よ、三保谷の四郎、これにあり』と、渚に丁ど討つてかゝる、刀を払う長刀の、えならぬ振舞ひいづれとも、勝り劣りも波の音、打ち合ふ太刀の鍔元より、折れて引く汐返る雁。勝負の花を見捨つるかと、長刀小脇にかい込んで、兜の鍬を引掴み、後へ引く足よろ〳〵〳〵、向ふへ行く足たじ〳〵〳〵、むんずと鍬を引き切つて、双方尻居にどつかと座す。『腕の強さ』と言ひければ、『首の骨こそ強けれ』と『ハヽヽヽヽヽヽ』『ホヽヽヽヽヽ』笑ひし後は入り乱れ、手繁き働き兄継信、君の御馬の矢表に駒を掛け据ゑ立ち塞がる、

「オヽ聞き及ぶその時に、平家の方には名高き強弓、能登の守教経と名乗りもあへずよつ引いて、放つ矢先は恨めしや、兄継信が胸板にたまりもあへず真っ逆様」

あへなき最後は武士の、忠臣義士の名を残す、思ひ出づるも涙にて、袖はかはかぬ筒井筒、いつか御身ものびやかに、春の柳生の糸長く、枝を連ぬる御契り、などかは朽ちしかるべきと、互に勇め〳〵られ、急ぐとすれどはかどらぬ、芦原峠かうの里、土田六田も遠からぬ、野路の春風吹き払ひ、雲と見紛ふ三吉野の、麓の里にぞ

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。